



Title	初級学習者の漢字辞書使用について：漢字熟語検索における問題点
Author(s)	伊藤, 早苗; 鈴木, 正子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 4, 38-57
Issue Date	2000-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/45587">http://hdl.handle.net/2115/45587</a>
Type	bulletin (article)
File Information	BISC004_004.pdf



[Instructions for use](#)

# 初級学習者の漢字辞書使用について

## — 漢字熟語検索における問題点 —

伊藤 早苗・鈴木 正子

### 要 旨

本研究の目的は、初級日本語学習者が漢字熟語を漢字辞書で検索する際に困難となる点を明らかにすることである。調査では、初級学習者に未習漢字熟語を含む短文中の漢字語彙を漢英辞書を使用して検索する課題を課し、学習者の漢字検索過程をビデオカメラで記録した。また、そのビデオを見せながら事後インタビューを行い、ビデオカメラとテープレコーダーで記録し、資料とした。その結果、熟語検索においては接辞の認識、文脈との照合、辞書の熟語の記載法、一字単位のまとまりの認識が問題となることが明らかになった。また、単語検索においても、単漢字検索の困難点である字形と部首の認識の問題点が共通することが明らかになった。

〔キーワード〕 初級日本語学習者、漢字辞書、熟語検索、語構成、文脈との照合

### 1. はじめに

北海道大学留学生センターでは初級学習者を対象にした研修コースの中で、漢字学習の時間には漢字運用能力の養成を目標として、漢字辞書を使って漢字語彙を検索する活動を取り入れている。その中で学習者によって達成度に差が見られたことから、困難となる点を把握する必要を感じ、調査者らはこれまでに辞書検索行動の調査を行ない、単漢字検索のケースは多くが漢字パターン認識に関するものであることを明らかにした(鈴木・伊藤 1999a, b)。本稿は、初級学習者の漢字熟語検索行動に焦点をあてる。

初級学習者の漢字学習においては、単漢字レベルの形態的特徴と表意性の知識に加え、熟語レベルでの造語性も重要な学習項目である。さらに、漢字語彙を文脈と照合し、語義を吟味する能力は読解の基礎ともなり、学習者が初級以後に語彙を拡大する重要な基礎ともなる。ちなみに北海道大

学留学生センターの研修コース（初級）の漢字クラスにおいて、学習する漢字語彙中の熟語語彙は43.8%を占めている（付録1）。

このように初級学習者にとって、漢字熟語は重要な学習項目であることから、その学習の実態について明らかにされなければならない。本研究においては初級学習者が漢字辞書を使用した熟語検索行動を分析することにより、初級学習者が漢字熟語をどのように認知しているかを実証的に研究するものである。

## 2. 先行研究

### 2.1 初級学習者の漢字辞書使用

学習者の辞書使用の意義についてカイザー（2000）は、成人学習者の早い段階での辞書使用の可能性を考慮し、画数が多い複雑な漢字の構成要素を弁別しボトムアップで漢字を認識する練習としてあげている。また、柳町（1999）は学習者の漢字辞書検索を漢字の運用力を向上させるものとして意義付け、「習得した漢字やその用法に関する知識を応用し、漢字が関わる様々な言語タスクをこなしていく」ための「漢字 proficiency」を提唱し、初級段階においても実際に使用されている文脈の中の漢字を検索することの重要性を指摘している。

運用能力についての認知心理学的な観点から小林（1998）は「漢字知識を獲得し運用能力をつけるということは、漢字の形・音・意味を記憶し、読解時にすみやかに検索できるようになること」と定義付け、漢字学習の記憶プロセスにおいては、「学習の際の符号化の手がかりと実際の検索時の手がかりの関係が深いほど、記憶成績はよくなる」ことから、漢字学習において「漢字知識の検索」を伴う読解活動が初級段階においても必要であることを指摘している。ここで述べられている「漢字知識の検索」とは、認知心理学的な意味で、記憶された知識を活性化することを指し、辞書使用での検索行動を意味するものではない。しかし、漢字辞書使用において、漢字の字形と音についての知識の活性化がその過程において必要であることから、漢字辞書で漢字を検索する行為は漢字の運用能力に深く関わっていると見える。

以上は学習について教授者側からの視点での論考であるが、学習者側の漢字学習の意識については、大北（1995）は米国の初級学習者を対象に漢字学習ストラテジーを調査した結果、「辞書を使う」ストラテジーは被験

者全体では30項目中26位であったが、学習の段階が進むにつれて頻度が増加することを報告している。一方、中村（1997）は漢字学習ストラテジーを日本国内の初級学習者を対象に調査を行った結果、「習った漢字を辞書でもう一度たしかめる」ストラテジーが20項目中6位の頻度で使用されていることを報告している。これらの調査は、辞書使用が漢字学習ストラテジーとして認識されていることは共通であるが、その使用頻度は国外と国内では異なること示している。また、中村（1997）の調査項目は、学習者にとって辞書使用は記憶の強化という記憶ストラテジーとして意識していることを反映していると言えよう。

また、初級学習者の辞書使用の実態を調査したものとしては、鈴木・伊藤（1999a,b）が単漢字検索において漢字パターン認識（画数、部首の認定、漢字を各部位に分ける）による困難点を明らかにしている。学習者の漢字検索行動の調査は、学習者の漢字の認識を明らかにし、運用力の基盤となるものを考察するうえで有効な調査方法であると言える。

## 2.2 初級学習者にとっての漢字熟語学習

漢字熟語の学習の時期を単漢字についての知識が習得された後におく考え方として、玉村（1993）は「最初期の300ないし500字は要素文字を中心にし、第二期以後は複合文字中心に移行し、熟字（熟語）指導の部分を増やすのが望ましい」としている。一方、これに対する異論を提出した加納（2000）は、コミュニケーションな学習法により、提出される漢字語彙が増加することから、語彙教育としての漢字熟語の学習が初級後半から中・上級にかけて必要であることを指摘している。

初級学習者を対象にした市販の漢字教材には熟語の語構成や接辞がとりあげられ（加納・清水・竹中・石井 1989a,b）、初級段階での熟語学習の重要性を打ちだしている。オーセンティックな文脈の中での熟語学習の実施については、Yanagimachi（1999）は漢字運用力の向上を目標とした漢字クラスについて報告する中で、実際に使用した教材の実例をあげ紹介している。

このように初級段階での熟語学習の重要性は概ね共通理解となっていると言えるが、その実証的な調査は調査者らの知る範囲では未見であり、研究が必要である。

### 3. 調査

本稿では、初級者の漢字辞書を使用した熟語検索について焦点をあてる。また、文脈と漢字語彙の照合ができるかどうかを調査するため、短文中の漢字語彙を課題とした点も、前回の単漢字検索の調査と異なる点である。

#### 3.1 調査方法

調査の対象、観察方法、分析項目についての詳細は、鈴木・伊藤（1999b）にあるので、本稿では簡潔に述べ、課題については詳述する。

##### 3.1.1 調査の対象

調査の対象は非漢字圏の初級学習者9名である（表1）。

表1. 学習者の母語

学習者	母語	母国での日本語 学習歴の有無	学習者	母語	母国での日本語 学習歴の有無
A	ベトナム語	有	F	*ロズイ語	無
B	スペイン語	無	G	インドネシア語	有
C	タイ語	無	H	ミャンマー語	有
D	スペイン語	有	I	タイ語	無
E	ミャンマー語	有			

\*ロズイ語はザンビア西部地方の共通語

学習者の中に母国での日本語学習経験のあるものと無いものがある。学習経験のあるもの5名（A, D, E, G, H）は、プレースメントテストを受けて、研修コースのうち、既習者を対象とするクラスに在籍した。また、学習歴のない4名（B, C, F, I）は研修コースのうち、未習者を対象とするクラスに在籍した。

##### 3.1.2 課題

調査者の作出した短文中の漢字語彙を辞書を使用して検索し、読み方と意味を記入するよう指示した（図1）。

問題2. <sup>した</sup> <sup>みん</sup> <sup>なか</sup> <sup>し</sup> <sup>かんじ</sup> <sup>ことば</sup> <sup>の</sup> <sup>言葉</sup> <sup>について</sup>、<sup>よ</sup> <sup>み</sup> <sup>か</sup> <sup>た</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>み</sup> <sup>れい</sup> <sup>の</sup> <sup>よう</sup> <sup>に</sup> <sup>か</sup> <sup>い</sup> <sup>て</sup> <sup>く</sup> <sup>だ</sup> <sup>さ</sup> <sup>い</sup>。  
いてください。

例：あの人は誰ですか。

だれ(who)

- ① お金を借りるときは、返済できる金額にしなければいけない。
- ② 炊事の道具はどこにありますか。
- ③ 先生のお宅へうかがうときは、連絡してからのほうがいいです。
- ④ 雪が降ったので、今日この道は渋滞しています。
- ⑤ あの人は無資格なのに学校で教えています。
- ⑥ 山田さんは昆虫類の研究をしている。
- ⑦ 田中さんはいつも芸術家風の帽子をかぶっている。

### 図1. 熟語検索課題

課題実行に際し、時間制限は設けなかった。課題の指示文が「問題2」となっているのは、単漢字課題である問題1の続きであることによる。

熟語検索課題で文脈を伴う課題とした意図は2点である。まず、漢字語彙の意味を文脈と照合して吟味できるかどうかという観点である。2点目は、日本語の表記法に分かち書きがないことから学習者にとって熟語の語単位の識別が問題となる点(フメリヤク1996)を考慮し、熟語の語単位の識別に困難が表れるかどうかを調査の観点に加えるためである。課題文中に含まれる単漢字の語彙(例、「お金」「借りる」)は研修コースでの既習の漢字であり、文脈を形成するために課題文中に使用した。学習者によってはそれらの単漢字を検索するものもいたが、本稿では分析の対象としない。課題の短文は、談話レベルでの読解力を要因から除去するため、相互に不連続であり談話を形成していない。また、文法能力の要因を除去するため、短文の構文は初級段階で既習の文型を用いた。

課題中の熟語は2字から4字までで、語構成の認識を調査するため接辞<sup>1)2)</sup>を含むものと含まないものを取り上げた。短文中の漢字熟語16語のレベル<sup>3)</sup>は級外2、一級3、二級4、三級3、四級4である。また漢字熟語にあらわれる漢字36字のレベルは級外0、一級4、二級14、三級8、四級10である。また、漢字熟語中の漢字は既習字19、未習字17である(付録2)。接辞のあるものは「無資格」「昆虫類」「芸術家風」の3語である<sup>4)</sup>。

このように一・二級の未習漢字、未習語彙を含む課題は、初級学習者にとってある程度チャレンジングな課題であったと言えるが、三・四級の既習字が過半数を占め、短文の構文は初級レベルであることから、初級の学習者にとって手の出せない課題ではない。

使用辞書は研修コースで教材として学習者が所持している『新漢英字典』、調査者が用意した和英辞書、『日タイ辞典』のほか、学習者の常時使用している日本語母語辞書も認め、事前に持参するように指示した(表2)。

表2. 課題実行時に学習者が使用した辞書

辞書名	辞書名の種類	使用した学習者
『新漢英字典』	漢英辞書	全員
“Progressive Japanese-English”	和英辞書	B、F
“Từ điển tra cứu và cách Viết chữ hán trong tiếng nhật”	日本語ベトナム語辞書	A
『日タイ辞典』	日タイ辞書	無し

### 3.1.3 観察方法

一回につき一人の学習者の課題実行中の行動を、ハンディ型ビデオカメラ二台で収録した。一台は学習者の上半身の動きを、もう一台は、学習者の手の動きに焦点をあて、辞書使用における検索行動と課題用紙への記載行動を撮影した。学習者が課題を終了した後、学習者の手の動きを撮影したビデオを見せながら、日本語、英語、タイ語を使用して事後インタビューを行った。事後インタビューはビデオカメラと音声テープで記録した。

### 3.1.4 分析項目

単漢字検索において調査項目とした検索方法の種類、検索回数、達成と不達成、間違い検索<sup>5)</sup>の他に、①語構成の認識のしかた、②文脈との照合の有無、の2項目を加えた。以下に新しく加えた項目について述べる。

#### ①語構成の認識のしかた

熟語の語構成をどのように認識しているかという点と、接辞の有無を認識していたかという点が、語構成の認識に関わる観点である。熟語内の漢字の検索の順番を観察し、事後インタビューで学習者がどのように語構成

を認識しているかを質問する。

#### ②文脈との照合の有無

検索して得た意味を文脈と照合し選択したかどうかについての項目である。事後インタビューにおいて、文脈との照合を行ったか否かを確認する。

### 4. 結果と考察

#### 4.1 熟語検索の困難点

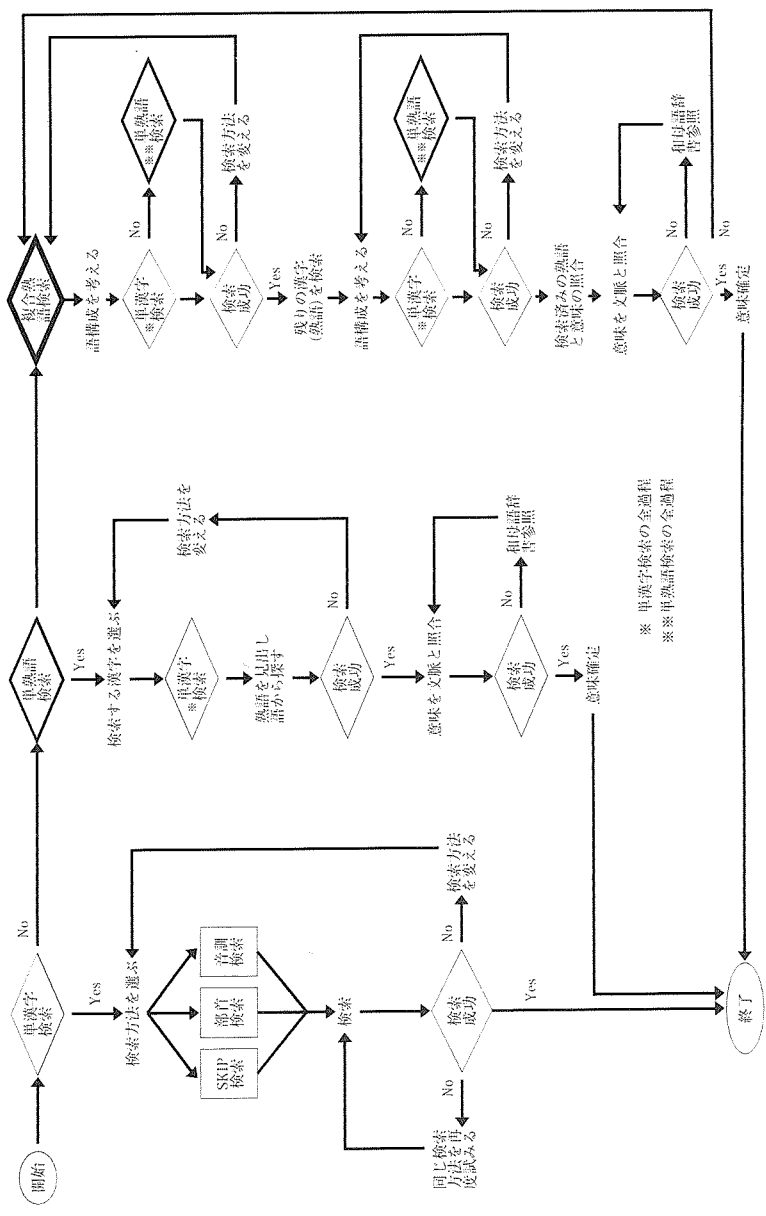
漢字語彙の構造によって検索の難易度が異なることが、学習者の検索行動の観察を通して明らかになった。本稿ではその複雑さを比較するため、検索語の種類を、単漢字語彙、単熟語語彙、複合熟語語彙の3つの分類を設ける。単熟語とは、「返済」や「春夏秋冬」のように2字以上の漢字で1つの熟語を構成し、二つ以上の熟語や、接辞と熟語に分離できないものを指す。また、複合熟語とは「無資格」や「暖衣飽食」のように漢字3字以上で構成され、そこから接辞成分や、熟語が分離できるものを指す。

検索語の種類ごとに検索過程(図2)を比較すると、単漢字検索では検索方法の選び方とその正誤が検索の達成の要因となることがわかる。また、単熟語検索においては、単漢字検索の前に熟語内のどの漢字を検索するかを選ぶことと、辞書の記載項目の見出し語の中から該当熟語を探す手続きが加わる分、複雑になる。さらに、複合熟語検索の場合は、単熟語検索に加えて、熟語の語構成を考えると、熟語内の要素同士の照合の手続きが加わり、一層複雑になる。なお、単漢字課題の調査では文脈を提示しなかったため、文脈と意味の照合の手続きはされなかった。

このように熟語検索においては、単漢字レベルより検索手続きが複雑化するので、単漢字検索レベルでは検索できていても、熟語語彙としての意味を正しく検索できない事態が生じる。したがって、漢字語彙の構成が複雑になるにつれて、検索が難しくなると言える。



図 2. 検索語の構造的な検索過程



次に熟語ごとの検索回数を学習者別に表3に示す。

表3. 検索回数(熟語/学習者)

学習者	研究	学校	連絡	帽子	炊事	金額	道具	渋滞	返済	昆虫類	芸術家風	無資格	合計
A				1	1	1	1	1		1	3	3	12
G			2	1	2	1	1	1	2	3	3	2	18
C		1		1	1	1	1	4	2	3	2	3	19
E			1	2	1	1	1	3	3	3	4	2	21
B		2	1	1	1	1	1	1	2	2	3	8	23
H		1	1		1	1	4	1	4	3	3	4	23
I	1	1	1	1	3	1	1	3	3	2	3	3	23
D			1		2	3	2	1	5	4	4	3	25
F		1		5		3	1	1	2	4	9	8	34
合計	1	6	7	12	12	13	13	16	23	25	34	36	198

この結果を見ると、「昆虫類」「芸術家風」「無資格」が単熟語よりも検索回数が多いことから、接辞を含む語の構成の複雑さは、熟語検索の困難点であると言える。しかし、すべての熟語を学習者全員が検索したわけではなく、途中で「無資格」の検索を諦めた学習者がいたり、「芸術家風」の訳語の正しさという観点からは達成と言えないものがあるので、検索回数だけで論じることはできない。また、単熟語の中では「返済」が一番多く検索されている理由、複合接辞がある「芸術家風」よりも「無資格」の方が多く検索されている理由、学習者間に差がある理由は数量的データを示す表3からは不明である。

そこで、事例を詳細に検討し、熟語検索の困難点を接辞の認識、文脈との照応、辞書の構造、1字単位の判別の4点から考察する。

#### 1) 接辞の認識の困難点

「無資格」という語自体は辞書の見出し項目にはなく、接辞「無」と「資格」の語構成の認識が検索には必要となる。学習者の中には「無」が接辞であることを知っていた者もいたが、「無」の項で「無資」あるいは「無資格」の見出し語を探す行動を示す例があった。「無」の項には『新漢英字典』には“prefix”という説明もあったが、それに気付いた学習者は一例だけであった。また、「芸術家風」の語構成を「芸術」に接辞「家」と

「風」がついたものと正しく認識できた者はいなかった。「芸」の項で「芸術」を見つけた後、「家風」で一つの熟語と誤解したのである。『新漢英字典』には「家」「風」それぞれに“prefix”の説明があるが、それに着目したものはなかった。

以上のように、接辞が含まれる熟語においては語構成の理解が困難点となっている。

## 2) 文脈との照応

辞書の記載内容は文脈と照応して吟味しなければ、正しい訳語は選択できない。熟語の訳として学習者が解答したものの中で誤ったものは「芸術家風」の訳語である。“art customs” “the arts family tradition customs” “family of art” など、「家風」を一つの熟語として訳してしまう誤りを学習者全員がしていた。これは、前述の語構成の誤りが、文脈との照応によって訂正されることなく残ってしまった例である。事後インタビューで、「芸術家風の帽子」をどんなものと想像したかを尋ねてみたが、「よくわからない」とか「芸術を伝統的な家業とする者がかぶる帽子」と答え、接辞の認識はなかったことがわかった。また、文章全体の意味を考えたかどうかを聞いたが、十分に文脈と照合したことを示すものはなく、よくわからないままにとりあえず訳を書いた様子がインタビューで明らかになった。

## 3) 辞書の構造の要因

熟語を漢字辞書で検索する場合、どの位置に親字があるものを記載しているかが問題になる。『新漢英字典』に記載されている熟語は親字が語頭、語中、語尾のいずれの位置にあるものも含まれている(例、「中」の項では、中心・左中間・年中のように3つのパターンの熟語が記載されている)。しかし、熟語中のどの字を検索すれば見出し語が見つけれられるかは、語彙量の少ない初級学習者にとっては偶然に左右されることが多い。例えば、「資格」は「資」の項ではなく、「格」の項に記載されている。「無」の項には「無資格」はないので、次に「資」を検索した学習者は、「資」の熟語を全部スキャンした後、「格」を検索してやっと「資格」を見つけることができる。この一連の検索行動が「無資格」の検索回数を多くした原因の一つともなっている。

このように、どの親字の項にどの熟語が記載されるかという辞書の構造に関わることも、熟語検索における問題点と言える。

#### 4) 熟語中の一字単位の識別の問題

学習者ごとの検索回数は、学習者Fが34回と最も多い(表3)。この学習者に顕著なのは、文章中の字形の認識の中で特に一字単位の認識に関する困難点であった。学習者Fは「帽」の検索に際し、まず、「日」を音符と考へて検索し見つけられず、次に「日」を部首と考へ、部首検索で「昌」を見つけたことから、「帽」が「巾」と「昌」の2文字であると考へ、次いで「巾」をSKIPで調べた。そして、それぞれの音読みと「子」の読み方をつなげ「キンショウコ」という読み方をメモし、和英辞書で検索する、という行動をとった。これは、漢字の一字の識別の誤りと、画数の誤りという字形認識における二重の誤りをしたことになる。また、「額」を「客」と「頁」に分割するなど、横書きの文中での一字の識別に問題があった。このような問題があったのは学習者Fだけであり、検索回数が多くなった要因であると考えられる。

一字単位の識別の問題は、本調査においては学習者Fのみであったが、研修コース読解クラスの速読の練習において調査者は次のような間違い例を数例観察した。

1. 漢字「外」をカタカナの「夕」「卜」の二文字と認識するような誤り。

2. 縦書き文において、半濁音の「°」を文末の「。」と認識する誤り。

これらの誤りを起こした学生は学習者Fと母語も違い、その表記法もアルファベット表記のロズィ語とは違うものであった。このことから、一字単位の識別の問題は学習者F個別の問題でも、母語特有の問題でも、また、漢字認識のみの問題でもなく、一部の初級学習者に見られる一般的な問題と考えられる。しかし、どのような条件で起こるのか、間違いを起こす学習者にどのような傾向があるのか、学習過程のどの時期までなのかなどの点は、現時点では明らかではない

#### 4.2 単漢字検索と熟語検索の比較

ここでは、熟語を構成している単漢字の検索行動について、検索法と間違い率を調べ、単漢字課題の検索行動と比較した。

表4. 検索方法別検索回数

	SKIP	部 首	音 訓
単漢字検索	56%	37%	7%
熟語検索	59%	26%	15%

表4は、単漢字検索課題と熟語検索課題実行時に使用する検索方法の割合を示している。ただし、ここに分類した検索回数は、単漢字レベルのものであり、熟語の読み方がわかってからさらに和英辞書を検索したものは計上されていない。

これを見ると、いずれもSKIPによる検索が一番多く、次に部首による検索、そして音訓による検索が一番少なくなっている。両者の違いは熟語検索課題で音訓を使用する率が高いことである。これは単漢字検索課題では未習漢字のみであるが、熟語検索課題では既習の漢字も含まれているからと考えられる。

次に、検索方法別の間違い率に差があるかを見てみる(表5、6、7)。

表5. SKIP 検索による課題別間違い率(単漢字・熟語)

	SKIP 誤	SKIP 正
単漢字検索	67.5%	32.5%
熟語検索	20%	80%

表6. 部首検索による課題別間違い率(単漢字・熟語)

	部首誤	部首正
単漢字検索	56%	44%
熟語検索	32%	68%

表7. 音訓検索による課題別間違い率(単漢字・熟語)

	音訓誤	音訓正
単漢字検索	44%	56%
熟語検索	24%	76%

検索の間違い率は、熟語検索のほうがどの方法においても低くなっている。これは、1) 熟語検索課題では既習の漢字も含まれており、2) 単漢字検索課題は画数の多い漢字、部首の認定が困難と思われる漢字、SKIPパターンの認定が困難と思われる漢字を選定したが、熟語検索課題では、

既習・未習とその組み合わせ、接辞の有無を考慮して選定したため、単漢字のレベルで見ると平易であったからと考えられる。

表8は熟語検索の正誤を漢字ごとに示したものである。

表8. 間違い検索回数 (漢字/方法別)

	昆	額	資	洪	道	濟	帽	滯	返	事	校	芸	家	風	虫	無	類	連
SKIP	3/8	1/6	3/6	3/9	4/7	2/6	1/8		1/6	0/2	0/1	0/6	0/2	0/5	1/3	1/3	1/8	1/5
部首	1/2	4/4	2/3	1/3	0/2	0/6	1/2	2/3	1/3		1/1	1/4	1/4	1/1	0/1	0/6		0/1
音訓	3/3		0/3	1/1	0/1	1/1	1/1			1/1		0/1	0/4	0/5		3/3		

\*分数の母数は漢字・方法別の総検索回数を示す

さらに、字形に関する間違いの種類を調べた結果、単漢字検索の際の間違いと同様の間違いがみられた。SKIPパターンを間違えたケースは「洪」で、1(左右)型を2(上下)型と間違えたケースが1つ、3(囲み)型と間違えたケースが1つ、「資」において2型を上部の「次」を見て1型と考えたケースが1つあった。

画数の数え間違いでは、「昆」の下部「比」を6画としたケース、類の左の部分を10画としたケース、「濟」の「氵」を2画としたケースなどがあった。「濟」の「氵」を2画としたケースはフォントによって引き起こされた間違いとも考えられる。また、検索方法の間違いはないが、フォントの違いによって見逃してしまった例として、「資」があった。初級学習者はフォントの違いにより、同一と認識できなかつたり、逆に違うものを同一と考えたりする。調査に使用した課題文は教科書体で作成したものであるが、新漢英字典では索引に明朝体、見出し語にゴシック、説明部分に明朝体が使用されているため、間違いが引き起こされたものである。

部首の認定ができなかったケースにおいても、他の部分を部首と考える、画数を数え間違える、フォントの違いで見逃すなど、単漢字検索で見られたものが多かった。

また、音の認識の間違いの中で、検索ストラテジーに関わると思われる特徴が見られた。例えば、「昆」の「日」を音符と考え、「ヒ」の音で検索したり、「洪」を「雪が降ったので」という文脈から「すべる」と読むのではないかと推測して音訓検索するといったように、未習漢字に対しても、読み方を考える行動が見られた。また、「濟」のさんずい偏の意味である「みず」を読み方と考えて検索するというような、部首と音符の混同からくる

検索も見られた。未習漢字の読みかたを正しく推測した例は無かった。一方、既習漢字を音訓検索により検索できた漢字は「家、学、金、術、道、風」で、誤った読み方によって見つけられなかったものは1例のみである。

## 5. まとめと今後の課題

今回、初級学習者による文脈の中での漢字熟語の検索行動の困難点を明かにし、文脈のない未習単漢字検索行動とを比較して分析を試みた。その結果、次の熟語検索上の困難点が見いだされた。

- 1) 接辞のある熟語の語構成の認識
- 2) 漢字語彙の意味と文脈との照応
- 3) 一字の単位の認識
- 4) 熟語がどの親字の項目に配置されるかという辞書構造の把握

また、単漢字検索と共通する問題は次の2点が明らかになった。

- 1) 字形認識の誤りの多くは単漢字検索において現れるものと同様であったが、文脈中の熟語検索にのみ見られる誤りもある。
- 2) 音訓による検索において、検索ストラテジーの使用例が見られた。

以上の結果から、漢字学習項目の検討に対する示唆として以下の点が考えられる。

- 1) 文中の字形認識に関しては、文字種に関わらず問題となる学習者がいることも事実である。字形認識の苦手な学習者によっては、文字間のスペース、漢字の字形要素と一文字の大きさの違いなどを識別する練習をさらに強化する必要がある。
- 2) 研修コース（初級）の漢字クラスの漢字知識の学習項目に「形声文字」も含まれている。本調査では間違い検索ではあったが、未習漢字を音訓で検索する例が見られた。初級の学習漢字は限られているが、導入すべき形声文字の選定、類推の効率的な方法を考える必要がある。
- 3) 語構成と接辞については研修コースの漢字クラスで学習項目としてとりあげ、実施しているものであったにも関わらず、学習者にとっては定着・運用の困難なものであったことを今回の調査結果は示している。語構成と接辞に関する項目と時間配当を見直す必要があるだろう。
- 4) 文脈と意味の照合の困難点は、語彙や構文の限られた初級学習者にとって克服が難しいが、漢字クラスというよりも、読解・会話・文法・聴解などの技能の向上とも関連づけて対応すべきだろう。

また、今後の研究課題としては、学習者にとって検索しやすい漢字辞書とは何かを見直す必要がある。そのためには、今回のような実証的調査に加え、広範囲の学習者から漢字辞書についてのアンケートや、聞き取り調査をしたいと思う。

注：

- 1) Vance (1990) は同一漢字が独立語としても接辞としても使われうること (例. 「下」と「一下」)、意味としては接辞的に使用されてもアクセントが置かれる場合があること (例. 「各一」) をあげ、「接頭辞的 (prefix-like)」あるいは「接尾辞的 (suffix-like)」な特徴を指摘している。しかし、漢字の接頭辞と接尾辞の学習は中級レベルでの語彙拡大を促進する重要な学習項目であり、漢字学習という実用的な目的のためには接頭辞と接尾辞と分類することが妥当としている。
- 2) 課題中の接辞は『新漢英字典』で接辞としての説明があるものである。
- 3) 語彙レベルの判定にはインターネットの「辞書ツール」(川村・北村・保原 2000) を使用した。
- 4) 接辞は漢字クラスの学習項目としてとりあげられているが、教材である漢字シートには記載せず、必ず覚えなければならない漢字としては扱っていない。課題中の接辞「無、類、家、風」の中で「無」は既習者対象クラスでとりあげられたが、その他の接辞は既習者対象クラス、未習者対象クラスどちらでもとりあげられなかった (付録2)。
- 5) 間違い検索：『新漢英字典』において正しくないと見なされている分類による検索、及び課題の達成に至らなかった検索。相互参照によって達成できたものも間違い検索と見なす (鈴木・伊藤 1999 b)。
- 6) 『新漢英字典』は SKIP (System of kanji indexing by patterns : 字型式検字法) と名付ける検字法を採用している。これは部首の知識がなくても検索できるように字形の特徴から左右型、上下型、囲み型、全体型の4つに大別し、各構成要素の画数によってさらに下位分類することによって検索する方法である (鈴木・伊藤 1999 b 参照)。

#### 使用辞書

漢英辞書：ハルペン・ジャック編『新漢英字典』(1990) 研究社  
和英辞典：“Progressive Japanese-English Dictionary” 小学館



日本語ベトナム語辞書：“Từ điển tra cứu và cách Viết chữ hán trong tiếng nhật” Nhà xuất bản văn hóa (1945字の漢字を収録し、読み方と熟語が数語示され、親字と熟語の意味がベトナム語で記載されている。音訓索引、総画索引、ベトナム語索引がある)。

日タイ辞書：コーサー・アリヤ編『日タイ辞典』(タイ国教師会)

### 【参考文献】

- 大北葉子 (1995) 「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」『世界の日本語教育』5号 pp.105-24
- カイザー・シュテファン (2000) 「非漢字圏日本語学習者のための漢字・語彙教育のシラバスに関する考察—認知心理学実験の知見を踏まえて—」『筑波大学留学生センター日本教育論集』第15号 pp.25-34
- 加納千恵子 (2000) 「中上級者に対する語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本教育論集』第15号 pp.35-46
- 加納千恵子、清水百合、竹中弘子、石井恵里子 (1989 a) 『BASIC KANJI BOOK VOL.1』凡人社
- 加納千恵子、清水百合、竹中弘子、石井恵理子 (1989 b) 『BASIC KANJI BOOK VOL.2』凡人社
- 川村よし子、北村達也、保原麗 (2000) “日本語読解学習支援システムリ—ディングチュウ太” [Online] Available: [<http://language.tiu.ac.jp/>] [Sep.2000]
- 小林由子 (1998) 「漢字授業における学習活動—認知心理学的モデルによる検討—」『北海道大学留学生センター紀要』2号、北海道大学留学生センター、pp.88-102
- 鈴木正子、伊藤早苗 (1999 a) 「初級日本語学習者の漢字辞書使用について—単漢字検索—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.6 No.2 pp.24-25
- 鈴木正子、伊藤早苗 (1999 b) 「初級日本語学習者の漢字パターン認識について—単漢字検索における問題点—」『北海道大学留学生センター紀要』3号、北海道大学留学生センター、pp.89-113
- 玉村文郎 (1993) 「日本語における漢字—その特質と教育—」『日本語教育』80号 pp.1-14
- 中村重穂 (1997) 「日本語学習者の漢字学習ステラテジーに関する調査と考察」『日本語教育研究』第33号 pp.107-22 言語文化研究所

- フメリヤク・クリスティーナ (1996) 「日本語学習者の辞書使用における  
実態調査」筑波大学地域研究研究科修士論文
- 柳町智治 (1999) 「辞書検索能力を養成する初級漢字クラス：新たな『漢  
字 proficiency』の提唱」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.6 No.1  
pp.32-33
- Vance, T. (1990) *Instant Vocabulary Through Prefixes and Suffixes*.  
Kodansha International.
- Yanagimachi, T. (1999) A functional kanji syllabus for beginning-level  
learners: Promoting and evaluating kanji proficiency. In Makino, S.  
(ed.), *The Proceedings of the Seventh Princeton Japanese Pedagogy  
Workshop*, pp.83-96. Princeton, NJ: Princeton University, Department  
of East Asian Studies.

#### 謝辞

本研究をすすめるにあたって、貴重な時間を提供し忍耐強く調査に協力  
してくれた学習者各位に感謝をする。また、中村重穂助教授、紀要編集委  
員の方々から多くの助言をいただいたことに感謝をする。すべての助言を  
容れられなかったのは調査者の責めに帰するところである。

付録 1

表 9. 初級漢字クラス学習語彙中の単漢字語彙と熟語の割合

課	語彙数	単漢語数	熟語数	複合	接辞他	備 考
1	13	13	0			
2	12	10	2		(1)	～人
3	11	11	0			
4	15	11	4			
5	25	3	22	(1)		曜日 ～日、～月
6	16	5	11	(1)	(3)	週間 ～時、～分、毎～
7	14	11	3	(1)	(1)	何色 ～語
8	12	10	2			
9	10	0	10	(1)		電気工学
10	15	14	1			
11	16	16	0			
12	15	14	1			
13	17	12	5			
14	13	9	4			
15	17	11	6		(1)	～車
16	12	10	2			手伝う
17	12	1	11		(1)	～物
18	12	4	8		(1)	～階
19	14	13	1			
20	15	14	1		(1)	～手
21	17	12	5			
22	20	0	20	(5)	(3)	～過程、指導教官、～生、～室、～号
23	13	9	4			
24	13	1	12		(1)	～式
25	15	5	10		(1)	～者
26	12	1	11		(1)	～館
27	17	6	11		(1)	～中
28	16	4	12	(1)		身分証明書
計	409	230	179			
率	100	56.2	43.8			

\* 学習漢字語彙において、複合語、接辞について特に取り上げたものではない。

\* 複合語、接辞については漢字知識に関する講義で語構成、接辞として取り上げている。

学習した接辞 (1998年10月期)

A Bクラス (10字) 接頭辞 (不、非、各、未)、接尾辞 (上、中、化、力、料、用)

Cクラス (15字) 接頭辞 (不、非、各、未、無)、接尾辞 (人、所、手、上、中、化、力、料、性、的、用)

A Bクラスはゼロレベルの初級学習者を、Cクラスは母国での日本語学習歴が初級前半を越えないものを対象とした研修コースで、漢字クラスの教材は共通であるが、担当者によって付加する語彙が異なる場合がある。漢字クラスの学習項目は1999年10月期以後、改善が加えられている。

付録 2.

表10. 課題熟語の構成 (既習/未習、語構成、漢字レベル、語彙レベル)

熟 語	既習○/ 未習●	語 構 成	漢 字 レベル (級)	語彙レベル (接辞の あるものは、接辞を 除いた熟語として) (級)
返 済	○●		2・2	1
金 額	○●		4・2	2
炊 事	●○		1・3	2
道 具	●○		3・2	3
先 生	○○		4・4	4
連 絡	●●		2・2	3
今 日	○○		4・4	4
渋 滞	●●		1・1	2
無 資 格	●●●	接辞+●●	2・2・2	1
学 校	○●		4・4	4
山 田	○○		4・3	級外
昆 虫 類	●●●	●●+接辞	1・2・2	1
研 究	○○		3・3	3
田 中	○○		3・4	級外
芸 術 家 風	●○○○	(●○+接辞)+接辞	2・2・3・3	2
帽 子	●○		2・4	4

表11. 課題熟語のレベル別割合

	漢 字	熟 語
級 外	0	2
1	4	3
2	14	4
3	8	3
4	10	4
計	36	16

## The use of kanji dictionaries by learners of Japanese at beginning level: Problems in searching for kanji-compounds

ITO, Sanae and SUZUKI, Masako

The aim of this study is to investigate the difficulties in the use of kanji dictionaries by learners of Japanese at beginning level, focusing on the search process of kanji-compounds. Informants were given the task of looking up kanji-compounds in short sentences in kanji dictionaries. The search process and follow-up interviews were recorded with video cameras and taperecorders. The findings are that (1) recognition of affixes, checking word meaning with the context, the organization of kanji dictionaries, and the recognition of kanji units cause problems for beginning learners in looking up kanji-compounds; (2) recognition of kanji-patterns and radicals causes problems both in looking up single-kanji words and in looking up kanji-compounds.